

越前浜発祥の概要（平成二十二年改訂）

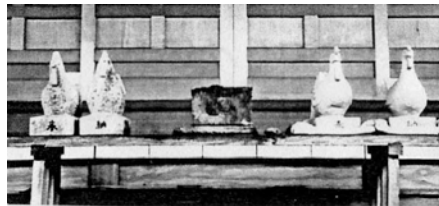
（社寺・集落に関わる伝承）

一、鳥之子神明社と越前浜集落

一五七三年（天正元年）戦国大名の朝倉（刀根坂の戦い）・浅井（小谷城の戦い）が信長に破れ、その後自害に追い込まれ滅ぼされた。朝倉義景（一乗谷五代）四十一歳、盟友浅井長政二十九歳の短い生涯であった。そんな中で家臣はばらになり、生活も困窮、更に各地に一向一揆も発生する乱世であった。そして、多くの領民は圧政から各地に逃れようとしたのである。

そのような中であつて、当集落も一五七八年頃（天正六年前後）三里浜（小橋屋、大橋屋、川尻、米ヶ脇など）の主として小橋屋村（現福井市両橋屋町）の住民の一部が海路現地に逃れたのが当集落形成の始まりである。

伝承によれば、夜陰に乗じて三隻の舟で分乗して逃れたが一隻は途中で沈没、他の一隻は佐渡の相川（旧小川村）に漂着、残る一隻が当海岸―角田岬―に漂着したのである。寒さと飢えの中で鶏の鳴き声を耳にし人家のある事を知ったとき、どんなにか救われた気持ちになったことだろうか。この第一陣の人数は、七人衆とも八人衆ともいわれている。



奉納された鶏の子像

「数年前、佐渡より小川部落民当村を訪れ、奇しき因縁と再会を喜び帰島す。」という先人の記述も残っている。また、七人衆は、金子、小川、早見、山下、篠沢、鈴木、斎藤、鵜（浅井の臣）とある。



神社拝殿

その後、一五九八、一五九九年（慶長三、四年）にかけて第二・三陣を迎え入れ、本格的な集落形成がなされていった。この両隊は二十八人衆といわれるが、三隊合わせて二十八人衆ともいわれ、どちらか定かではない。その中で、第二陣の人々が小橋屋村の検地帳を持ってきたといわれている。

特定できないが、二十八人衆として、小川、山川、小林、玉川、古井、川見忠蔵、川見七右エ門、清水、小川元右エ門、小川勘平、長倉、広川、藤巻・・・。



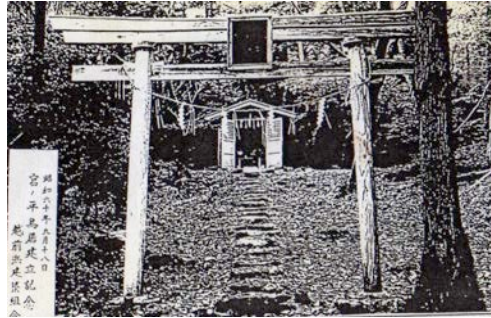
旧（鳥之子）神明社遠景

鶏の鳴き声に導かれて上陸した先人達にとって、正に鶏は「命の守り神」としての存在となった。その深い絆と心のより所となる鶏を祭神として「鳥之子神社」あるいは親しみを込めて「鳥の子サマ」として崇敬してきたのである。また、闇をつらぬいて「ときの声」を挙げ、いつか羽ばたきたいと思う気持ちと重なっていたのかもしれない。

以来三百六十余年の永きにわたり、一九四五年（昭和二十年）代の戦後まで、鶏肉は言うに及ばず、鶏卵の食断ちもしてきたのである。病人に止むを得ず滋養として食べさせたいときは、「鳥の子サマ」に鶏卵を供えてお詣りをし、許しを請うてから食べさせたのである。また、全国的にも知られた「毒消し売り」の出稼ぎ女性が多く、その出先で止むを得ず鶏卵を食べたときは、その旨故郷の家族に手紙で

知らせ、「鳥の子サマ」に鶏卵を供えてお詣りをし、許しを請うたのである。

当時の「鳥の子サマ」への信仰の強さを思い知らされるのである。



宮之平 祠

当初、角田岬に上陸した先人は、角田山麓の御坊沢（いくつかの坊があった所）辺りに居住したこともあり、その地に祠もあったが風雨や砂塵で痛みも激しく、時には無宿者の雨宿りの場となったりで困惑したようである。そんなことから、そこからさらに登った比較的平らな地に祠を移したのである。標高にして約百メートル、近くの登山口より約二十分程、現「宮之平」といわれている所である。そこには小さな祠と由来記の石碑（大正期）、再建された朱の鳥居、ひそかに佇む水芭蕉も見られ、今でも老人会が例年整備の手をさしのべている。

当集落は一六一一年（慶長一六年）角田浜の枝村から越前興野村として独立、代官検地で始めて「新浜（にいはま）」として村立が認められたのである。

その後、角田浜集落の東部海岸寄りに沿って集落の広がり形成していったようである。そして、一六二三年（元和九年）「越前郷屋村」となり、角田浜との境界も定められた。

このような推移の中で「鳥之子サマ」を崇敬する人々は、一日（発願）と十六日（満願）の月二回、険しい「宮之平」への山道を辿ったのである。年老いた人々には決して楽な道ではなかった筈である。

時は流れ、一八五二年（嘉永五）ようやく現地に遷宮されたのである。その時の社はどんなものだったのだろうか。そして、一八九〇年（明治三〇）に現在の社殿、一九一二年（明治四五）に拝殿

が竣工され、鳥居や灯籠も順次整備されていったのである。

その後、時代の要請の中で、一九二一年（大正一〇）天照大神を祭神とする「神明社」（神社庁登録）となったのである。しかし、「鳥之子サマ」としての歴史の重みを受け、お札は「鳥之子神明社」となっている。

現在の越前浜の地名は、一八八九年（明治二二）「越前浜村」となったのが始まりである。そして、一九〇二年（明治三五）角田・四ツ郷屋と合併し、「角田村大字越前浜」となった。しかも、村役場や小学校の本校をもち、（角田・四ツ郷屋は分校）角田村の中心的存在を担ってきたのである。その後、一九五五年（昭和三〇）町村合併により「巻町大字越前浜」として推移。その後平成の大合併により他市町村より少しおくれて二〇〇五年（平成一七）新潟市に合併、「西蒲区越前浜」として現在に至っている。

社殿の脇にひそかに祭られている通称「山の神」は、宮之平にある祠の迎え神として崇められてきたものである。近年再建された祠である。

社殿落成より百余年、拝殿落成より約百年、その痛みも激しく、「社」を心の故郷として現在の礎を築かれた先人を偲びながら、平成七年、さし当たって拝殿の竣工に至ったものである。

【鳥之子の森】

立ち枯れ等で荒れた広い境内（一・六ヘクタール）を何とかしたいと願い、平成二十五・六年にかけて整備計画の検討と植栽に努力してきた。（各種桜・タブの木・ヤブツバキ・ヒサカキ他）

諸経費を含め約六百五十万円余りの整備費は自治会からの助成の他、連れの寄付、企業団体からの寄付等で賄われた。やがて、歴史の重みに見合った風格と、「鳥之子の森」として地域内外から愛され親しまれることを期待している。



山之神（再度改築）



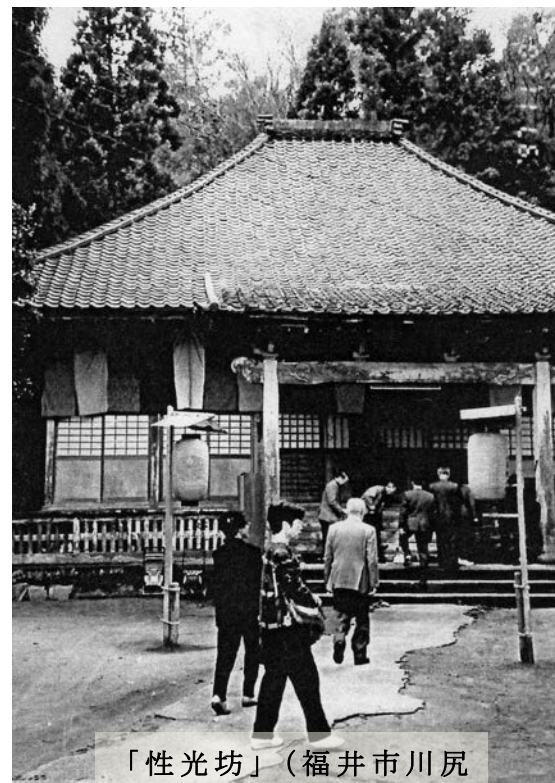
「歴史を宿していた心の故郷一本松」

—多くの出征兵士をも見送った—

平成5年（1994）3月松喰い虫被害で伐採

二、西遊寺

西遊寺は、慶長八年（一六〇三）越前国「西光寺」の六代目「性誓しょうせい」によって開基されたものである。その西光寺は、越前国川尻村（現福井市川尻町）に三宗（禅・密・台）を兼学する道場を開き、その後蓮如上人に帰依し、布教活動に励んだといわれる「性光」に起源を発している。



「性光坊」（福井市川尻）

初代「性光師」は兵庫県養父やぶし子の豪族で、越前の守護斯波氏しばに従っていた黒丸城六代目朝倉家景の弟「将景」が出家し、「性光」と号したのである。そして、妻帯しなかったため、七十才を過ぎてから七代目孝景（一乗谷初代）の二男「空了」を養子に迎え、蓮如上人の妹の娘「以真」（鯖江市西光寺）を娶った。その折、上人から「西海光照寺」：（西光寺）：の号をいただいたといわれる由緒ある寺である。その後、信長の一揆討伐に遭い、川尻の寺は一時無住になったこともあったという。



西光寺開基、「性光像」

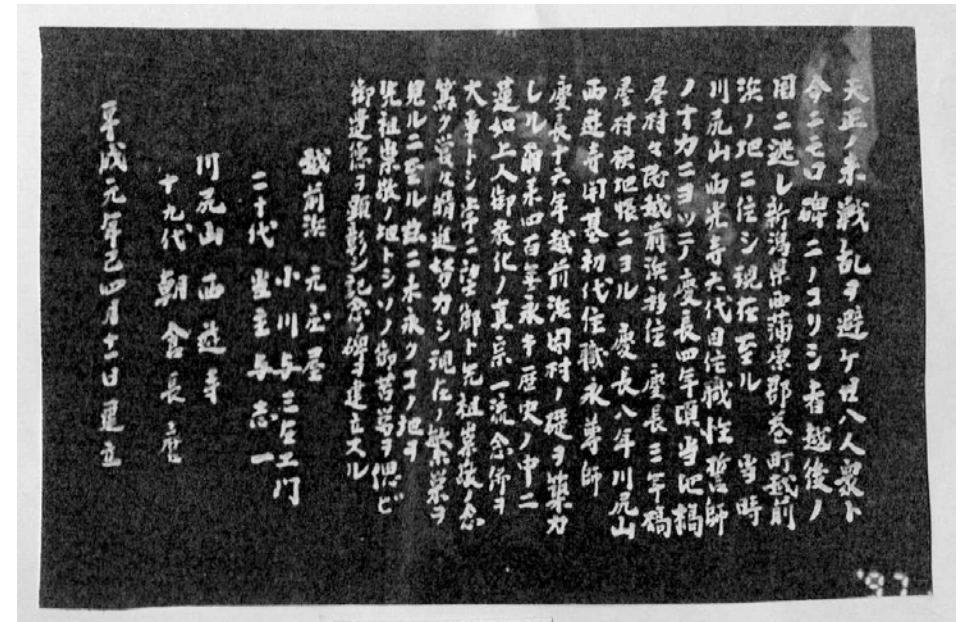
時を経て寛永十二年（一六三五）、門徒のお力添えで川尻の地より現在の米ヶ脇に引地されたのである。そして、「性光坊」は、西光寺の掛所（出道場）として歴史の重みを宿しながらその役割を担っているのである。然し、今年の春（平成二二年）諸事情により取り壊されたとのこと、これも歴史の流れだろうか。

このような西光寺と深い絆を持っている西遊寺は、一六〇三年（慶長八）に開基、初代住職は永尊師であるといわれる。



米ヶ脇 西光寺本堂（平成6年大修復）

性光坊に建つ記念碑（裏面）



天正ノ末、戦乱ヲ避ケ廿八人ト
今ニモ口碑ニノコリシ者、越後ノ
国ニ逃レ、新潟県西蒲原郡巻町越前
浜ノ地ニ住シ現在ニ至ル。当時
川尻山西光寺六代目住職性誓師
ノ才力ニヨツテ、慶長四年頃当地橋
屋村検地帳ニヨル。慶長八年川尻山
西遊寺開基、初代住職永尊師
慶長十六年越前浜開村ノ礎ヲ築カ
レル。爾来四百年ノ永キ歴史ノ中ニ
蓮如上人御教化ノ真宗一流念仏ヲ
大事トシ、常ニ望郷ト先祖崇敬ノ念
篤ク、営々精進努力シ現在ノ繁栄ヲ
見ルニ至ル。茲ニ末永クコノ地ヲ
先祖崇敬ノ地トシ、ソノ御苦労ヲ偲ビ
御遺徳ヲ顕彰シ記念ノ碑ヲ建立スル。

越前浜 元庄屋
小川与三エ門
二十代 当主 与志一
川尻山 西遊寺
十九代 朝倉 長磨
平成元年乙四月十一日 建立

ところで、その初代住職は朝倉氏最後の戦国大名となった五代義景の遺児「愛王丸」が出家、改め「永尊師」であるというロマンを秘めた説が一般化され、碑文にも刻まれているようである。どのような史実に基づくものだろうか。

故郷 —ロマンと郷愁—



西遊寺本堂（明治11年建立・平成9年修復）



地元福井市史編纂委員である郷土史研究家の著書に次のような一文が見られる。

「一五七三年（天正元）八月、義景と共にその子「愛王丸」と母「小少将」^{（こしょうしょう）}、そして、義景の母「光徳院」の四人は、わずかな供と共に大野へ逃れたが、従兄弟の景鏡^{（かげあきら）}の裏切りにあい、義景は賢松寺で自害、他の三人は捕らえられ、義景の首と共に京都に向けて護送された。しかし、南条帰りの里（今庄町）近くで三人とも刺殺された。」とある。また、福井県教育庁文化課から発行されているガイドブックにも「愛王丸」が今庄で殺害されたと記されている。いずれにしても歴史の真実は真摯に探りたいものである。

西遊寺は当初、角田浜の境近く通称「古屋敷」にあったが、文久元年（一八六一）十二月に焼失、古文書・過去帳とも失われてしまった。今は旧寺屋敷としての墓地になっている。

現在の西遊寺は明治十一年（一八七八）十月に本堂が落慶。明治三十五年（一九〇二）に鐘堂が落慶されている。そして、一〇〇余年を経た平成九年（一九九七）十一月、内外の大修復をして現在に至っている。戦後、他地区からの移住者を除いては、一村一寺という伝統のもとに集落総べてを檀家とし、更に四ツ郷屋、巻、吉田、新潟地区にも広がりを持ち、遠くは関東方面にも分派した檀家を有し、その数は五〇〇有余、または、それ以上ともいわれ県内屈指の檀家数を誇っている。



ゆかりの地（性光坊）記念碑前にて（平 7.11）

墓地は、旧寺跡「古屋敷」と現寺屋敷の両地であり、十五日の早朝、裸足でお参りする習わしが戦後まで続いてきた。それは、開基前まで十里の道を遠しとせず、親鸞上人開基、強く帰依していた蓮如上人ともゆかりのある鳥屋野の「北山浄光寺」（現西堀）に十五日早朝お参りしたという習わしが、その後の墓参につながったものだろうか。今は裸足での墓参りは皆無であり、また、十五日の墓参には全く拘らなくなっている。裸足での墓参は子ども心にも奇異に感じたが、道中草鞋が切れて裸足であることもあった先人の苦労や信仰心の強さを具現したものであったろうか。私たちの風俗や生活習慣は時代と共に移り変わってはいるものの、そこかしこに旧来の因習が生きづいていることを知るのである。

※ 尚、寺号「西遊寺」は、本家西光寺の「西」

の一字と、一乗谷四代城主朝倉孝景建立、今は寺跡のみを残す遊樂寺の「遊」の一字を併せて寺号としたものであろうか。

歴史は過去を知ることではなく、現在をよりよく知る・・・（認識する）・・・ことであるといわれる。幾世代と移ろう中で、生あるもの形あるものはやがて無になる運命にある。歴史の重みを感じながらもやがて風化するとなれば、つたない考察もそれなりの意味があることを信じ改訂の稿とした。考察の及ばぬは次の世代に期待して。

二〇一〇年（平成二二年）―桜の花から、いつの間に紅葉を愛でる候となり―

あとがき

改訂に当っては、山下利論己氏にパソコン印刷を始め編集の全てに亘って快くご協力していただき、冊子の完成を見るに至った。心から感謝申し上げます。

また、参考資料やお世話・助言をいただいた方々の名を再度併記すると共に、新たにお世話になった方々の名を加え感謝の意としたい。

○巻町史資料

○戦国朝倉氏と越前浜の歴史（山下克典）

○越前朝倉一族（福井市史編纂委員 松原伸之）

○西光寺概史他・性光坊しおり

○西光寺のあゆみ（米ヶ脇西光寺）

○鈴木平八郎氏（古老）

○西遊寺十九代住職（朝倉長麿）

○石田誠太郎氏（有識者）

○神明社真田宮司（赤塚）

○斎藤忠雄氏（中央区女池）

○福井市役所（観光課）

○広浜昭一氏（福井市両橋屋町）

○一乗谷朝倉氏遺跡資料館（福井市）

○越前朝倉氏一乗谷（遺跡資料館）

○篠沢講氏（「鳥之子の森」整備期神徒総代）

○初版編集・ワープロ印刷

（元曾根小学校長・斎藤虎雄氏）